2022年9月3日（土）　日本社会学理論学会第17回大会（於：オンライン開催）
テーマセッション「社会学理論のデジタルトランスフォーメーション」

物質論的現象学（materialist phenomenology）の可能性
――メディアの浸透と社会学理論の変容――

高艸　賢
TAKAKUSA Ken

1　報告者の問題意識

- シュッツによって創始され、バーガー＆ルックマンによって展開された、いわゆる「現象学的社会学」の伝統
  - 「シュッツ研究」の層の厚さにもかかわらず、**バーガー＆ルックマン以降、学派の中核をなすような理論的研究は登場していない？**（←近年の試み：Knoblauch 2020）
- どうすれば現象学的社会理論のアップデートができるか？
- ひとつの方針：シュッツ、バーガー＆ルックマンの枠組みを問い直す
- 問い直しの契機としてのデジタルメディア

1　報告者の問題意識

- 以上の問題意識から、本報告ではニック・クドリーとアンドレアス・ヘップの共著『現実のメディア＝媒介的構築』（*The Mediated Construction of Reality*, 2017）を検討する

- 社会理論とメディア論の接続を指向
  - 「社会生活の礎石がいまやそれ自体潜在的に『メディア』によって形成されているのだとしたら（…）、**社会理論は、基礎用語としての『社会的なもの』に対して『メディア』がどのような含意を持つかを再考せねばならない**」（p. 2）
- 本報告の目的は、『現実のメディア＝媒介的構築』の検討を通じて、現象学的社会理論のアップデートの可能性を模索することである

（本の概要）

- 現代社会はメディアが浸透し、「あらゆるものが媒介されている」時代である。
- バーガー＆ルックマンの古典的現象学はメディアに媒介されたコミュニケーションを「意味形成過程」として捉えられる点で重要。
  - しかし、バーガー＆ルックマンにはメディアの議論はほぼ全く出てこず、また物質性に対する視点も弱い。
  - なので、「物質論的現象学」という形で展開させる必要がある。
- 現代のメディアコミュニケーションの網目は、行為者たちには全く見通せないほど複雑に編み上げられている。この網目を捉えるために、エリアスのフィギュレーション理論に依拠する。

2　物質論的現象学の構想

- 今日の媒介性はシュッツが予見しえなかった4つの点で深化している（pp. 28-9）
  ① 社会関係を維持する手段の比重が、直接的コミュニケーションから媒介されたコミュニケーションへと移っている
  ② 過去のコミュニケーションにおいてインプットされた情報が現在の日常生活に埋め込まれている（e.g., コミュニケーションの履歴）
  ③ 対面的コミュニケーションにおいてつねにメディアが利用可能である（e.g., 写真を見せる、ビデオを使う）
  ④ それら３つの変化をコミュニケーション行動の習慣・規範に組み込んでいる

3　空間と時間のメディア＝媒介的構築

- バーガー＆ルックマン：「他者の経験のなかでも最も重要な経験は対面的状況のなかで起こり、これは社会的相互作用の原型をなしている。他の一切の他者経験はすべてその派生態である」（Berger and Luckmann 1966=2003: 43）

←→もはや対面的状況は「社会的相互行為の原型」ではない（p. 84; Zhao 2006: 417）

- 時間についてはH. ローザ『加速する社会』に依拠（Rosa 2005=2022）

4　フィギュレーションとメディア

- フィギュレーション：人間の相互依存関係の網目
  - ➢エリアスの『諸個人の社会』『社会学とは何か』に依拠
- 「モノとメディア技術のアンサンブル」＋「意味の関係（relations of meaning）」（p. 67）

- メディア多様体（media manifold）＝「デジタル化したメディア環境全体の特徴である、相互に関係する複雑性」（p. 55）
- 行為者たちには見通しがたいほどメディアの網目
  - ➢現象学だけでは不十分で、フィギュレーション理論が必要な理由

5　データ化する世界

- バーガー＆ルックマンの前提：日常生活の世界は社会のふつうの成員によって現実として自明視されているだけでなく、「それらの成員の思考と行為から生じ、かつその思考と行為によって現実のものとして維持されている世界である」（Berger and Luckmann 1966=2003: 29　訳文は一部修正）

⇕

- 「自動化されたデータ収集とデータ処理が日常生活のすみずみまで浸透しているが、それは隠れて作動するという点で日常的な『思考と行為』とは全くかけ離れたものである」（p. 122）

6　規範的な問題提起（＊報告時間の都合で省略予定）

- 規範的な主張の展開は本書の主眼ではないが……
- 著者らの懸念：「深層メディア化の諸条件の下では、コミュニケーションの相互依存のインフラがますます複雑化し、データ化された社会秩序が形成される。それは議論に開かれた規範的正統性によりも、インフラの強制力……に依拠するのである」（p. 212）
  - 物象化（ホネット）としてのデータ化（pp. 222-3）
  - 「脱加速」（ローザ）の難しさと同様、「脱メディア化」の難しさ（p. 216）
    - ➢企業は営利目的でユーザーのデータを取り続け、データ過程はますます複雑化・不透明化していくが、ユーザーはメディアを放棄してそこから撤退することもできない
    - ➢「データ植民地主義」論へ（Couldry and Mejias 2019）

7　評価――古典的現象学は乗り越えられたのか？

【著者たちが古典的現象学の意義を過小評価している点】

（1）データ過程の正統性

- 巨大で複雑なデータ過程とデータインフラは、バーガー＆ルックマンの扱いうる問題領域の外側か？
- 人々が「アルゴリズムの正統性」などの問題について語り始めることで、データ過程やデータインフラに関しても「現実の社会的構築」の過程へと引きずり込まれることになるのではないか。（cf. データ・アクティヴィズム（Kazansky and Milan 2021））

7　評価――古典的現象学は乗り越えられたのか？

【著者たちが古典的現象学の意義を過小評価している点】

（2）不透明性の問題

- 「データ過程は、原理的に不透明でつねにすでに不透明な世界を作り出すのである」（p. 233）⇒「古典的現象学の想定と深く対立する」（p. 131）事態
- しかし、「生活世界の中に原理的に不透明な要素が含まれている」と主張するだけでは、シュッツの議論と対立するどころか、その手前で立ち止まってしまう。なぜならシュッツの議論は、「不透明であるにもかかわらず問題なく日常生活を送れるのはなぜなのか」という点にあるから（→逆に言えば「不透明性が問題になるのはいつ・いかにしてなのか」）

7　評価――古典的現象学は乗り越えられたのか？

【著者たちが古典的現象学の意義を過小評価している点】

（3）物質性の問題

- コミュニケーションと意味構築が生じる物質的過程（p. 3）は古典的現象学では十分に主題化できない、という含意が感じられるが……
- シュッツの「労働の世界（world of working; Wirkwelt）」：身体的に世界と関わる人間
- ベルクソンの『物質と記憶』：「哲学者仲間の議論など、どこ吹く風、何も知らないような人の立場」（Bergson [1896] 1959=2011: 12）に立っている
- 「物質性へのシュッツ的アプローチ」はありうるのでは？

8　おわりに――現実の変容と理論の再構築

- 問題関心：メディアの浸透を手がかりとして、シュッツやバーガー＆ルックマンの枠組みを問い直し、現象学的社会理論のアップデートの方向性を模索
- 『現実のメディア＝媒介的構築』は、「媒介（mediation）」という観点から現象学を考え直すことで、主観的経験と社会的コミュニケーションがいかにモノやメディアに依存しつつ意味的に生成しているかを明らかにしている
- シュッツを踏襲して言えば、「意味問題は時間問題である」だけでなく、「意味問題はモノと身体の問題でもある」？

- 古典的な理論を現代版にアップデートする方法とは？
  - 『現実のメディア＝媒介的構築』は、理論を「使った」研究ではあっても、理論を「作った」研究ではない

文献

- Berger, Peter L. and Thomas Luckmann, 1966, *The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge*, New York: Anchor Books.（山口節郎訳，2003，『現実の社会的構成——知識社会学論考』新曜社．）
- Bergson, Henri, [1896] 1959, *Matière et mémoire: Essai sur la relation du corps à l'esprit*, in *Œuvres*, Paris: Presses Universitaires de France, 159-379.（竹内信夫訳，2011，『物質と記憶——身体と精神の関係についての試論』白水社．）
- Couldry, Nick and Andreas Hepp, 2017, *The Mediated Construction of Reality*, Cambridge: Polity Press.
- Couldry, N., & Mejias, U. A., 2019, *The Costs of Connection*. Stanford University Press.
- Kazansky, Becky and Stefania Milan, 2021, "'Bodies not Templates': Contesting Dominant Algorithmic Imaginaries," *New Media & Society*, 23(2): 363-381.
- Knoblauch, Hubert, 2020, *The Communicative Construction of Reality*, London & New York: Routledge.
- Rosa, Hartmut, 2005, *Beschleunigung: Die Veränderung der Zeitstrukturen in der Moderne*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.（出口剛司監訳，2022，『加速する社会——近代における時間構造の変容』福村出版．）
- Schütz, Alfred und Thomas Luckmann, 2003, *Strukturen der Lebenswelt*, Konstanz: UVK Verlagsgesellschaft.（那須壽監訳，2015，『生活世界の構造』筑摩書房．）
- Zhao, Shanyang, 2006, "The Internet and the Transformation of the Reality of Everyday Life: Toward a New Analytic Stance in Sociology," *Sociological Inquiry*, 76: 458-474.

付記

- 本研究はJSPS科研費20H01582、20J00674による研究成果の一部です。